

徳島大教育

遠藤マツエ

目的：余暇は、生活者の心身の健康を保持し、自己実現の可能性を求める上から、家庭経営上の重要な検討課題である。前報では、余暇意識の仮説的構成を試み、要因別に判別可能な意見項目を抽出した。本報では、これを用いて生活者の実態を検討し、余暇意識の類型化を試みたので報告する。

方法：調査対象は、余暇と対置される勤労生活者群100名およびこれの対照として大学生群100名、計200名である。調査は質問紙調査法を実施し、分析はリッカートの累積評定法を用いた。

結果：①調査対象の全体傾向として、余暇に対する関心は高いが、関心をもっていないものもあるので、この意識のあり方を検討する必要性を認めた。②余暇の捉え方は、単なる余剰時間だけでなく、家庭生活にとって重要な内容をもつものであり、生きがいを与えてくれるものとして捉えられているようであった。③余暇意識の背景として、くらしむき満足度や生活目標は調査群別に異なっていた。しかし、物質面よりも精神面を重視する傾向がみられた。また、自由時間量は、大学生2時間～6時間以上、勤労生活者2時間～4時間であり、彼らが希望する自由時間量は現実に所有している時間量に近似していた。④余暇意識の類型化は初歩的な二次元による類型化を試みた。すなわち、仮説から余暇のとらえ方と余暇の過ごし方を基本軸とし、調査個体の軸への得点結果を比較することによって4類型化された。